

ガラテヤ人への手紙 4 章をお開き下さい。ガラテヤの教会には割礼を受けなければ救われない、若しくは割礼といった律法の行いをしなければ霊的になれない、そのような律法の行ないを続けなければ霊的に後退してしまう、そしてついには救いまでも失ってしまう。そのような間違っただけの教えが入り込んでおりました。パウロという新約聖書の大半を書いた、そして恵みをこよなく愛し、そして恵みの福音書と呼ばれるような、また手紙と呼ばれるような数々を書き記したそのパウロが開拓し、牧会したその教会にさえも恵みとは正反対の行いを強調する間違っただけの教え、非聖書的な教えが偽教師たちの手によって持ち込まれてしまったわけであり、ですから私たちもそのことをしっかりと見据えて認めて、私たちももすれば恵みによって救われたはずなのに、信仰によって義と認められたはずなのに、いつの間にか間違っただけの教えに心奪われ、そして行いに依らなければクリスチャン生活は全く出来ないとか、行いに依らなければ義と認められないかのような行為義人のその異端的な、もしくはカルト的な教えに汚染されないように、汚されることがないように、そしてその結果イエス・キリストの十字架の死が、あの恵みが全く無意味であったかのような、イエスの死がまるで犬死であったかのようなそんな間違いを犯してはならないということを肝に銘じて、このガラテヤ人への手紙を今も学び続けているわけであり、

今から見るこのガラテヤ人への手紙 4 章、それは同じテーマなのですが、改めて私たちは律法の下にある者ではなくて恵みの下にある者である。律法によって不自由となった、縛られたそのような者ではなくて私たちは恵みによってキリストにある自由を頂いた神の子どもであるということ、そしてその神の子どもは神の相続人であるということ、これをパウロはここで強調しております。これはキリストにある者のアイデンティティー、キリストにある者の身分、特権というものをまた教える箇所でもあります。私たちはクリスチャンでありますけれども、クリスチャンとは一体どういう人たちなのか、どのような身分なのか、そして私たちにはどのような立場、特権が与えられているのか。律法主義はそれを分からなくさせてしまいます。ですから私たちはしっかりと真理を学んで、イエスが言われる通り「あなたがたが真理を知り、真理はあなたがたを自由にする。」というその御言葉を胸に、真理から外れないように、真理にとどまっている限りは、私たちは常に自由であって何にも縛られない。素晴らしい特権が与えられているということを感じたいと思います。

早速 1 節を見て頂きたいと思えます。『¹ところが、相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも違わず、』まずは“相続人”という言葉に着目したいと思います。「私の親はそれほど金持ちではないので、何も相続するものなど私にはありません。」とあなたは思うかもしれませんが、キリストにある者は、クリスチャンは全員、神の相続人です。そして 3 章の終わりのところにも目を留めて頂きたいと思えます。3 章から 4 章にかけて、これは勿論章・節で切り分けてしまっただけのものではないのです。流れをしっかりとくみ取っていく必要があります。文脈に目を留めて下さい。3 章 29 節を見たいと思えます。『²⁹もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。』そして 4 章 1 節に“ところが”と続くわけですが。“約束による相続人”これが私たちクリスチャンの立場であり、また身分であります。そしてその約束というのは、やはり 3 章 22 節に記されておりました。『²²しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。(その後)それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。』この約束による相続人の約束というのは、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるものだと言われていました。3 章 26 節にも目を留めて下さい。『²⁶あなたがたはみな(例外なく)、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。』ですから、約束による相続人というのは、これはイエス・キリストに対する信仰によって神の子どもとされた者だというふうに言い換えることが出来ます。割礼を受けなくても、ユダヤ教徒にならなくても、それでも私たちはイエス・キリストに対する信仰によって神の子ども、すなわち神の相続人となれると、パウロは主張しているわけですが。それこそが信仰義認の教理であります。行為義認ではなくて信仰義認、これをパウロはこの手紙を通じて何度となく強調しております。

それが、**約束に相続人**という意味です。

そして**3章18節**にももう一度の留めて頂いて少しおさらいをします。『¹⁸なぜなら、相続がもし律法によるのなら、もはや約束によるのではないからです。ところが、神は約束を通してアブラハムに相続の恵みを下さったのです。』この神の相続というのは、律法による行いによって得るものではない、獲得するものではない。そもそも律法による行い、それを私たちは全く出来ません。完全に律法を守り行うことは私たちには出来ない。それは誰にも出来ないということが事実でありますから、もし律法による行いによる相続であるならば、それは誰にも相続はされないということになってしまいます。ところが、それは恵みによって与えられる。ただ信じるだけで、行いなしに信じるだけで救われる。

そして**3章16節**に『ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言っ**て、多数をさすことはせず、ひとりをさして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリストです。』**具体的にこの約束というのは、**創世記12章**のアブラハム契約のことを指しております。そしてその契約の中にアブラハムの子孫が含まれているのですけれども、その子孫は複数ではなくて、“**ひとりの子孫**”イエス・キリストを指しているとパウロは述べております。ですから、そのアブラハム契約によって祝福を約束されている、相続を約束されているその契約者の中に“**ひとりの子孫**”イエス・キリストが含まれているということです。

そして**3章**の終わりのところを見て頂くと**27節**から『²⁷**バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。』**アブラハム契約によって祝福を受けるその子孫とは、ひとりの子孫イエス・キリストを指しております。そしてイエス・キリストは律法のすべてを守り行なわれた方でありま**す。そしてイエス・キリストを信じる者は、イエス・キリストをその身に着た者となる。それはバプテスマという象徴的な行為によって表されてお**ります。つまりイエス・キリストと私たちは一体化されたものとみなされるわけ**です。キリストにあって一つ。28節**に『**ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。』**イエス・キリストと同じものとみなされた、同じアイデンティティーを持つ者。イエスは神の子ですから、私たちも神の子というそのIDを頂くわけ**です。その身分を頂戴するわけ**です。そして、それは私たちの行ないによるのではなくて、むしろイエス・キリストの行ないによるもの。それを信じた者には、同じ身分が特権として、同じ立場が与えられると。ですからイエス・キリストにこの祝福の約束が与えられているということは、そのイエス・キリストにつく者、すなわちクリスチャンにも、イエスと一体化された者にも、同じ祝福が及ぶということです。そして、何度も強調しておきたいと思いますが、ですからそれは私たちの行ないによって得るものではなくて、ただ単にイエス・キリストを信じるだけで、その素晴らしい祝福が、約束が、相続が頂けるということです。それを前提に、前置きに**4章**の方をもう一度見て頂きたいと思います。

『¹ところが、相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも違わず、』とありますが、“**子ども**”という言葉に次に目を留めて頂きたいのです。これはギリシヤ語で“**ネピアス**”と言います。この“**ネピアス**”という言葉は、実は**3節**にも使われております。**3節**のところでは、ちょっと違って訳しています。そこには『**まだ小さかった時には**』とあります。その“**小さかった時**”の“**小さい**”というのが実は“**ネピアス**”であります。新共同訳聖書では、この『**子どものうち**』の“**子ども**”というのは、“**未成年**”と訳しています。この“**ネピアス**”という言葉は、小さい子どもを指すわけ**です。「幼児」というふうにも訳せます。まだ成人していない未成年**ということです。

その一方で**3章26節**の先ほどお読みした『²⁶**あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子ども**です。』の“**子ども**”は、“**ネピアス**”ではありません。この『**神の子ども**』の“**子ども**”は“**ウイアス**”これは“**息子**”という意味です。息子というのは当然、法定相続人を指す言葉でもあります。小さい子どもというよりも、むしろ法定相続人。後見人無しでも相続できる年齢に達した者ということです。

3章7節にも『⁷ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。』この実は『**アブラハムの子孫**』の“**子孫**”という言葉も実は“**ウイアス**”であります。ですからこの『**アブラハムの子孫**』という言葉は、『**アブラハムの法定相続人だと知りなさい。』**というふうにも訳せるわけ**です。「アブラハムの息子」というのが直訳**ですけれども、その

息子は小さい子どもではなくて、むしろ「ウイアス」でありますから、「大きな息子」、「法定相続人」とであると訳せるわけですが。そして、この「ウイアス」という言葉は 4 章のキーワードであります。多用されています。4 章 4 節のところにも使われております。ただし、そこではイエスに対して使われているわけですが。ですからそこでは“御子”と訳されています。『⁴しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子(これが「ウイアス」であります。)を遣わし、』6 節にも同じ使われ方をしています。『⁶そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊(「ウイアス」の御霊)を、』さらには 7 節『⁷ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。』この“子”はウイアスです。「ウイアス」ですから当然相続人ということです。小さな子どもを指す「ネピアス」であるならば、相続人ではないわけです。そして 22 節。『²²そこには、アブラハムにふたりの子があつて(この“子”というのがイシュマエルとイサクです。)、』さらに 30 節にも『³⁰しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人になってはならない。」』“子ども”という言葉が使われていますが、これは小さな子どもではなくて、大きな子どもを指す、息子を指す「ウイアス」、法定相続人を指す言葉です。ですからこのようにしてキーワードが「ウイアス」でありますけれども、これはキリストにある私たちの身分・立場を表す重要語でもあります。

2 節に今度は目を移して下さい。『²父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。』小さな子ども「ネピアス」の場合はまだ相続出来ないので、後見人や管理者、財産管理人という人たちを必要とするわけです。そしてここで言われている後見人・管理者というのは、律法のことを指しています。3 章 24 節では“養育係”というふうに表示されています。『²⁴こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。』律法の役割・目的は、養育係・家庭教師のような存在、監督というふうにも言えます。そして 4 章では、その律法は後見人・管理者というふうにも表現されています。同じことです。成人するまでこの未成年の小さな子どもを管理する者です。これは当時の風習にも基づく言葉です。昔は裕福な家ならば、養育係という信任のおける奴隷を置いて自分の子どもの面倒を見させたわけです。外出する時にも必ずこの養育係が付いたわけです。そしてこの子どもが成人するまで後見人・管理者と呼ばれる人たちがしっかりと付いて、そしてしっかりと財産の管理もしたわけでありました。

3 節の方に『³ 私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷となっていました。』私たちも同じだ、と言われております。私たちも小さかった時、まだイエス・キリストを知る前(イエス・キリストを知ったら私たちは小さな子どもではなくて、もう「ウイアス」成人した息子ということです。法定相続人ということなので、その前の話です。)律法の下に身を置いていた時です。その“律法”という言葉は使われていませんが、『この世の幼稚な教え』というふうに表示されています。*印が付いていますので欄外を見て頂くと脚注に『別訳として「霊力」または「原理」』となっています。新共同訳聖書ならびに口語訳聖書ではこの部分を確かに「霊力」というふうに訳しています。「もろもろの霊力」「諸霊」というふうに訳しています。その場合は勿論悪霊のことを指すわけですが。この言葉は「原理」というふうにも訳せるとありますけれども、この「幼稚な教え」という言葉はギリシャ語で「ストイハイアン」という言葉は「初歩」という言葉です。元々は軍隊用語で、軍隊の一番前に整列する人たちのことを指したわけですが、その一番前に来る者。そこから「初歩」、アルファベットで表現すれば ABC というものです。基礎とか基本。ですからエレメンタリーな内容、エレメントというふうにも訳せますし、ベーシックということです。初歩。

全く同じ言葉がやはりパウロ手紙の中に使われております。コロサイ 2:8、「この世の幼稚な教え」と全く同じフレーズが使われています。『⁸あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。』「この世の幼稚な教え」それは「むなしい、だましごとの哲学」「人の言い伝えによるもの」というふうの意味されます。

もう 1 箇所同じくコロサイ 2:20『²⁰もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのよう、²¹「すがるな。味わうな。さわらうな」というような定めにとらわれるのですか。(いわゆる戒律主義です。律法主義のことです。それが「この世の幼稚な教え」です。)²² そのようなも

のはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。（「この世の幼稚な教え」はやはり「人間の戒めと教えによるもの」、人間の作った宗教です。カルトです。異端というものです。）²³ そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。『禁欲主義も含めてです。律法主義、禁欲主義、戒律主義、そのようなものは全てこの世の教えである。人間の戒めと人間の教えによるもの。人間の言い伝えによるもの、むなしいだましごとの哲学である。それがガラテヤの教会に持ち込まれた教えであります。ユダヤ主義者による律法主義です。「割礼を受けなければ救われない、霊的になれない、神の祝福を受けられない。神の相続を受けなければ、あなたがたは律法の行ないを全うしなければならない。」と、そういう教えです。それに真っ向からパウロは反対してガラテヤの人に対して叱りつけているわけです。「そんなことをすればキリストの十字架の死が全く無駄になってしまう。恵みを無駄にしてはならない。」と。ですから「この世の幼稚な教え」というのは、端的には律法主義、禁欲主義、行意義認の教理と言っていると思います。

旧約聖書の時代、イスラエルの人たちは「この世の幼稚な教え」と言われる律法の下に身を置いていたわけです。ただ問題は、その律法を彼らは守り行うことが出来なかったわけです。ガラテヤ 4:3 に『まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷となっていました。』律法に縛られていたわけです。9 節のところを少し先取りして見ますけれども、『⁹ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。』その「この世の幼稚な教え」律法主義というのは、無力で無価値であると。結局律法は人を救うことが出来ない、無力で無価値なものである。すべての国家の土台は法律というものに置かれております。法律が国の土台と言っていると思います。そして、その法律の基礎は、モーセの十戒であります。全世界の法律、どんな国であろうと、どんな民族であろうと、その法律の基礎はすべてモーセの十戒からとられています。ですからここで言われているベーシック、ABC、基礎というのは、確かに神の律法であります。すなわちモーセの十戒、それが国家の法律の基礎であって、その基礎が国家を形成しているわけです。

ところが私たちは法律すら守れないわけです。そして、法律を守れなければ、当然社会は腐敗し、社会は崩壊してしまうわけであります。社会が崩壊しないためにはどうしたらいいかと言ったら、法によって人を裁いて罰するか、もしくはそれができなくなるほど秩序が乱れてしまえば、もはや法律を変えざるを得ないわけであります。限界があるわけです。法律自体には人を変える力はありません。律法そのものには人を救う力がないわけです。それだけでは無力、無価値であります。ですから、それは「この世の幼稚な教え」に過ぎないということです。

4 節に『しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。』“しかし”という言葉はいつも有り難いです。「しかし定めの時」というのは、これは神が定めた時、神のタイミングで、神の御子私たちの救い主がこの世に現れ下さったわけです。その救い主は「女から生まれた者」処女マリヤから生まれたわけです。その意味というのは、イエス・キリストは普通の人だったということです。女から生まれていない人間というのはアダムだけであります。ですからアダムとは違って私たちと同じように女から生まれた。そして人生を赤ちゃんから始めて下さったわけです。成人から始めたのではなくて、アダムとは違って赤ちゃんから始めて下さって、そして私たちが通るすべての道を通り、私たちが味わうすべての苦難・試練も味わい、その上でイエス・キリストは罪を犯さなかったわけです。そのイエス・キリストは同時に「律法の下にある者」すなわちイスラエルの人、ユダヤ人であったということでもあります。

それらの理由というのが 5 節に書いてあります。『これは律法の下にある者を贖い出すため、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。』理由は「律法の下にある者」すなわちユダヤ人、イスラエルの人を救うため、贖うためであると。そして、その結果「子としての身分」が付与されるわけです。「子としての身分」これは養子とされるということなんですが、ギリシャ語でこの「子としての身分」というのは一語で表現されます。「ウイオテシア」と言います。この「ウイオテシア」という言葉は 2 つの単語の合成語であります。先ほども紹介した「ウイアス」

(「**ウイアス**」というのが成人した大人の息子、法定相続人を指す言葉だと先ほど紹介しました。)に「**ティスミー**」という言葉がくっついて「**ウイオテーシア**」と言います。この「**ティスミー**」という言葉は単純に「**立場・ポジション**」を表す言葉です。ですから直訳すると、逐語的に訳しますとこの「**ウイオテーシア**」という言葉は「**息子としての立場、法定相続人としてのポジション**」ということです。それを与えられる。かつては小さな子どもだったわけですが、そこでイエス・キリストを信じる信仰によって神の「**ウイアス**」、神の息子・相続人となる。実際のところ私たちは皆かつてはキリストを知る前は、罪の奴隷だったわけです。そしてその奴隷であった私たちがイエス・キリストの贖いの死によって命の代価を支払ってもらったことで奴隷から解放されて、そして神の家族の養子とされたわけです。驚くべき恵みです。そして、イスラエル人の場合は律法の下にあったわけです。律法の下にあった奴隷と言って良いと思います。彼らはやはりイエス・キリストによって買い取られて、そして子としての身分「**ウイオテーシア**」という法定相続人としての立場を与えられたわけです。神の御子「**ウイアス**」が、私たちの奴隷としての立場、罪人としての立場、律法の下にある者、女から生まれた者の立場をとって下さって、そして十字架の上で律法の違反、すなわち罪の代価をすべて体をもって支払って、そして私たちが今度は神の「**ウイアス**」の立場を頂いたわけです。奴隷の立場から神の子どもの立場、相続人の立場を頂いたわけです。立場が言わば交換されたということです。第二コリント 5:21 にも『**神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。**』神は、罪を知らない方すなわちイエス・キリストを私たちと同じ罪とされたわけです。その結果イエスは私たちと同じ罪、すなわち律法の下にある者で、裁きを受ける者、呪われる者となって、そして代わりに罪を知っている私たち、完全なる罪人のこんな私たちが神の義とされる、神の息子とされる、イエスと同じ神の息子としての身分・立場を与えられるという素晴らしい交換がなされているわけです。それが福音というものです。それは良い知らせに違いありません。

そして、そのような素晴らしい身分・特権・立場というものが、イエス・キリストを信じたその瞬間に与えられるわけです。子どもとされる、相続人とされるその身分は、イエスを信じたその瞬間、新しく生まれた瞬間に与えられるわけです。これは大事なポイントなのでしっかり押さえておいて頂きたいと思います。イエスを信じてしばらくしてから神の相続人としての身分が与えられるわけではないのです。クリスチャンの場合はイエスを信じたその時点で既に神の子どもでもあり、神が相続人であるということです。勿論生まれたてのクリスチャンは、いわゆるベビー・クリスチャン、赤ちゃんクリスチャンと呼ばれますけれども、でも同時に不思議なことですが、そのベビー・クリスチャンは既に「**ウイアス**」神の息子・相続人となるわけです。

ローマ 8:14~17 のところを参照して頂きたいと思います。『**14 神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子ども**です。(この子どももやはり「**ウイアス**」です。)¹⁵ **あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。**(「子としてくださる」これが「**ウイオテーシア**」です。「養子とされる。法定相続人とされる立場を与えられる。」というものです。) **私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。**¹⁶ **私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。**¹⁷ **もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であり、**』これがクリスチャンの立場です。回心したその瞬間、新生したその瞬間に私たちは「**神の相続人、キリストとの共同相続人**」とされるわけです。素晴らしい特権です。神のものはすべて神の御子のものであります。父なる神のものはすべてイエス・キリスト、子なる神のものです。そして私たちはその神の相続人、キリストとの共同相続人と言われていますから、実はイエス・キリストを信じた瞬間私たちは神のものをすべて受けたのです。もう相続したということです。「うちは貧乏で何も相続するものなんかありません。家屋もなければ土地もない。遺産も何もないのです。親から何も受け継ぐものなどありません。」とちょっと寂しい思いをしている人もこの中にあるかもしれませんが、でもクリスチャンであるならば、あなたはもう既に神の相続人である、キリストとの共同相続人である。この全宇宙はすべて神のものである。それには異論がないと思います。このすべては神の御子イエス・キリストのものであると言ってもあなたは別に異論はないと思います。でも実は聖書によれば、このすべてのものはイエス・キリストを信じる私たちクリスチャンのものである。その事実をあなたは知っているでしょうか、信じているで

しょうか。このことを知ると私たちはもう「あれがない。これがない。」ということでは心配しなくなります。例えば仮にあなたが世界一の富豪ビル・ゲイツの養子とされたらどうでしょうか。ビル・ゲイツの養子となってビル・ゲイツの財産をすべて引き継ぐ、受け継ぐという特権・立場が与えられたらあなたはどうなるでしょうか。支払いどうしようとか、「あれがない。これがない。」必要が満たされていないことを悩むでしょうか。もうビル・ゲイツの子どもですから何でも買えると言っても良いかと思います。でもそれ以上の私たちは相続を受けているということを知らなくてはなりません。クリスチャンになった途端にあなたは神の相続人、キリストとの共同相続人です。勿論それはこの世の目に見える財産をただ引き継ぐだけで終わってしまうものではなくて、むしろ永遠に残るものための相続を受けているということを感じたいと思います。確かにイエス・キリストは地上生涯を送られる時、マイホームも持ちませんでした。狐には穴があっても人の子イエス・キリストには枕するところもなかったとあります。決して地上ではリッチな生活は送られていませんでしたけれども、しかしイエス・キリストを見てホームレスでも惨めだと言う人は誰もいなかったわけです。何も持っていないようでもすべてを持っている。貧しいようでも富んでいる。それがイエス・キリストの姿でありました。この方にはすべてがある。この方にもないものはない。むしろこの世において得られないものがこの方にはすべてあって、この方から頂ける。イエス・キリスト以上にリッチな方、豊かな方はこの世にはおられないと人々は認めたわけでありました。ですからすべてを手にしたニコデモという人物も、彼は大金持ちでした。しかもユダヤ教の神学校の校長、ラビを教えるラバンという最も名誉ある立場です。サンヘドリンの議員という今日で言うところの裁判官であり、また法律家であり、検察官でもあり、弁護士でもあって、そして大学教授のような人。そして彼は大きなビジネスも抱えていました。伝説によれば彼は井戸掘りをしていたわけです。エルサレムにおいて井戸掘りをするということは、まさに金塊を手にしたような、または原油を手にしたような、そういうリッチな人でないと得られない仕事です。何不自由ない生活を送っていたわけですが、でもそのニコデモが夜わざわざイエスの所に来たわけです。「自分には足りないものがある、欠けたものがある。救われているという実感が無い。すべてを手にしていう満足感がない。」と**ヨハネの福音書 3 章**にそのニコデモとイエスの対話が出てきます。イエスは「人は新しく生まれなければ、上から生まれなければ神の国に入ることは出来ない。神の相続人とはなれない。」と言われたわけです。私たちはイエス・キリストを信じたことで既に神の相続人です、キリストとの共同相続人。私たちにはもうないものはないということです。すべては私たちのものとなったということです。霊的な祝福が私たちには与えられております。それは計り知れない価値のあるものです。永遠に価値のある、永遠に残るもの。具体的にそれが何かということを知りたいければ、**エペソ 1 章**を讀んでみて下さい。キリスト・イエスにある私たちの財産がどのようなものか、どれほど富んでいるものか。それは霊的祝福という言葉で表現されています。具体的な内容を**エペソ 1 章**で私たちは既に学んできました。クリスチャンになった途端に私たちは神の相続人となったということをしかりと心に明記して頂きたいと思います。これが分からない人たちは「私はまだ救われて間もないし、まだ救われて 5 年しか経っていません。信仰歴が浅いので私のような者はまだまだ神様には用いて頂けない。」とか、よくそういうことを私は耳にします。「私はまだ救われたばかりなので、まだ信仰歴が浅いので、私のようなものはまだまだ。」とか、まだ神様には用いて頂けないとか、そんな力はないとか、そういうことを皆さんも口にもすると思いますし、聞いたこともあると思います。でもそれは自分の立場が全く分かっていないということでもあります。私たちは既にイエス・キリストを信じたその瞬間、オギャーと言ったその瞬間から、もう神の成人した法定相続人と見なされているわけでありました。すべてはもう既にあなたのものとなっているのです。これから得るのではないのです。既にあなたはすべてを得たわけです。そこから私たちはクリスチャン生活を始めることが出来るわけです。最初からリッチなのです。クリスチャンになってから一生懸命禁欲して、律法主義・戒律主義に奔って沢山の行ないを積んで、善行を積んで、修行して苦行して、その果てに神の相続を受けるというのではないのです。神の祝福に与るとか、霊的巨人になるとか、そういうことではないのです。それがこの世の教えです。幼稚な教え、宗教です。人の作った教えです。でも聖書では、私たちはイエス・キリストを信じたその瞬間から神の相続人となる、キリストとの共同相続人となる。これは聖書の言葉ですから真理であります。あなたがたが真理を知り、真理はあなたがたを自由にするのです。私たちはもうこの世の幼稚な教えに縛られません。「もっと信仰歴を重ねなければ、もっと

聖書を読まなければ、勉強しなければ、もっと訓練を受けなければ、神学校に行かなければ、もっと経験を積まなければ、そうしなければリッチになれない。そうしなければ豊かな者として神に用いて頂けない。」そう思ったらあなたは全然聖書の真理を分かっていない、自分の立場をわきまえていないということです。あなたはクリスチャンになったその瞬間からもうすべてのものを持っているのです。これから得るということではないのです。既にもうすべてのものはあなたのものです。そこからクリスチャン生活を始めなくてはなりません。もう頂いているという前提で、ないものねだりをするのではなくて、もう既に頂いている。強いて言うならば、今日に見えるものを皆さんは与えられていないと思って求めて、それでも祈っても与えられないならば、それはあなたにとって必要ないということです。少なくとも今の段階では必要ないということです。必要はすべてもう与えられているわけです。あなたは既に豊かな者です。だから神はあなたをすぐにでも用いることが出来ます。

今度は **6 節 7 節**に目を留めて下さい。『**6**そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。**7** ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。』私たちは御子の御霊、これは勿論聖霊のことです。それを与えられています。イエス・キリストを信じた瞬間、聖霊が私たちのうちに住んで下さいます。その聖霊は御子の御霊です。その御子の御霊を通して私たちは父なる神のことを「アバ、父」と呼ぶことが出来ます。素晴らしい立場・身分・特権です。敢えてパウロは「アバ」という原語を使っています。ヘブル語です。アラム語由来ですけれども、「アバ」それは、お父さん、お父ちゃん、パパです。ダディといった意味です。非常に親しみを込めて呼ぶ言葉であります。

マルコの福音書 14 章 36 節を参照して頂きたいと思います。十字架刑の前夜イエス・キリストがゲッセマネの園で祈られた際、イエスは、神の御子は父に向かって「アバ、父」と呼びかけました。『またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。』この祈りをイエスは3度も繰り返されました。血の汗を流しながらです。イエスは父なる神のことを「アバ、父」と呼んだわけですが、そのイエスと同じ御霊が私たちのうちに与えられていて、私たちもイエスと同じように父なる神を「アバ、父」と呼ぶことが許されているのです。これが特権だということを覚えて欲しいと思います。クリスチャンだけです。神様のことを「アバ、父」と呼ぶことができるのは、この素晴らしい特権を是非活かして頂きたいと思います。「神様」と呼びかけても勿論間違いではありません。でも私たちはこの神を「お父さん」と呼べるのです。「パパ」と呼べるのです。「ダディ」と呼べるのです。「アバ」と呼べるのです。お祈りの際に「天の父なる神様」とか、「天のお父様」とか、いろんな言い方がありますが、是非この神を「父」と呼んで頂きたいと思います。ただ「神様」と言って祈る人もいますけれども、もったいないと思います。あなたの神は、あなたのお父さんなのです。神が自分のお父さんという実感のない人は、あまり呼びたがりません。自分と神との関係が祈りの中にも反映されます。本当にあなたの神は親しみを込めて呼べるような「アバ、父」でしょうか。「神様、神様」「主よ、主よ」と言う人もいますけれども、そういう呼び方をしてはいけないと言っているのではなくて、折角私たちは神の子どもとされたのですから、イエスと同じ御霊が与えられているのですから、私たちはイエスと同じように「アバ、父」と。イエスは祈りの際には「神」とは呼ばなかったのです。強いて言うならば十字架の上で罪を負われた瞬間、「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」と。その瞬間だけは「父」と呼ばずに「神」と呼びました。イエスが神のことを「神」と呼んだのはその瞬間だけです。むしろイエスは常にこの神のことを「アバ、父」と。弟子たちに『**主の祈り**』というものを教えられた時もそうでした。その時も「神」というふうに呼ばせたのではなくて、「**天におられる父**」と、「父」と呼びなさいとイエスは教えられたわけです。なのにクリスチャンが神のことを「父」と呼ばないで、ただ、ただ「主」と言うのはいかなものかと私はいつも思っております。ですから皆さんも注意して下さい。祈る際に「神様」と言うのではなくて、むしろ「父なる神」とせめて呼んで下さい。「パパ」と言う人もいますけれども、ちょっと私はそれには違和感がありますが、別に悪いとは思いませんが、「天のお父ちゃん」とか、「天のお父さん」とか、そういうふうに呼んでも差し支えないということです。ひとりで祈る時には「パパ」でも「ダディ」でも何でもいいですけれども、ただ大勢の前で祈る際には戸惑う人もいますから、私たちは単純に主に教えられた通り「天の父よ」と。「天

のお父様」でもいいと思いますし、「父なる神様」でもいいと思います。そういう言い方をすべきだというふうには思っていますが、ただこの神との関係をもっと親しいものとして私たちは受け止めなくてはなりません。これは与えられている特権ですから、しっかりとこの関係を意識して頂きたいと思います。律法主義にある者は、この神のことを「父」とは呼べません。律法主義の者たちは、自らを奴隷としているわけですから、奴隷が主人のことを「アバ」とは呼べないわけです。奴隷は絶対に神を「アバ」と呼んではいけないのです。

でも神の子どもならば父のことを「アバ、父」と呼ぶことが出来るわけです。ですから私たちは神の子どもですから、単純にそれはもう主人と奴隷の雇用関係ではないわけですから、愛すべき父と子どもの愛の關係に私たちは置かれているわけですから、そのことを覚えればこそこの神を呼ぶ時には、ただの「神」ではなくて、ただの「主」ではなくて、むしろ親しみを込めて「アバ、父」「天のお父様」「父なる神様」そのように呼ぶべきなのです。「アバ、父」と呼びかけることのできる幸い。クリスチャンだけがこの関係をもって神に祈ることが出来るわけです。祈りは神との対話です。お父さんとのコミュニケーションです。これは特権です。「祈らなきゃいけない。」それは律法主義です。「クリスチャンは祈らなければならない。」確かにその通りですけれども、それは「そうしなければ救われない。」とか「そうしなければ霊的祝福が受けられない。」という律法主義に基づくものではなくて、愛の關係に基づくものです。愛があるならば会話があるはず。愛がなければ、強制されない限りは中々私たちは口を開こうとしません。私たちは「アバ、父」とこの神のことを呼んで、いつでもどこでも何でも話せるのです。どんなことでも相談できるのです。求める者には与えてくださるお方です。この父は完全な父であります。慈愛に満ちた父であります。私たちは肉の父とこの天の父を重ねてしまうかもしれません。「私のお父さんは、いつも厳しい人で、テストで百点取らなければ私には何も与えてくれませんでした。」とか、「言いつけを守らなければ、何も報いてくれませんでした。だから私も天の父に対していつも百点を取るように頑張ろうとするのです。頑張っていないければ、ちゃんとやっていないければ、良い子でなければ神様は私によくしてくれない。何も与えてくれない。だから私はこの神を“父”とは呼べないのです。」それはこの世のしがらみ 柵から来ているものです。この世の幼稚な教えから来ているものです。私たちはもはやそのように考えません。そのようなメンタリティーに縛られません。「天の父は、私の肉の父とは全然違うのだ。この方は完全な方。この方は憐れみ深く、そして恵みに富んだお方であります。」**マタイ 7 章 11 節**にある通りの方です。マタイのセブンイレブンです。『してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。』これが私たちのコンビニエンスストアです。無料で頂けます。いつでも開いています。いつでも必要なものはそこから得られるのです。このコンビニのオーナーは私たちのお父さんですから、お父さんは子どもからお金は取りません。素晴らしい父ですね。私たちはこの父と、「アバ、父」と呼ぶことの出来る親しいを愛の關係を結んでおります。そして、これがイエス・キリストによって与えられたものであります。私たちの頑張りだとか犠牲によるものではないのです。私たちの良い行い、善行によるものではないわけです。父、子の關係。雇用關係ではないのです。ただの主従關係ではないのです。愛の關係、それは言われなくてもやります。命じられなくても、強制されなくても、相手を喜ばせることを行う。それが愛の關係にあるものです。ですから愛というものは実は律法以上のことをやってのけるのです。律法も沢山のことを行います。それは強制されるからです。命じられるからです。「やれ」と言われるからです。ですから沢山やります。でも愛は実は律法以上のことをやってのけてしまうのです。言われなくてもやるからです。命じられなくてもやるからです。進んでそれに加えて喜びを持って自発的に行ってしまうわけです。愛があるならばそこにはルールは要りません。規則なんか要らないのです。縛りをつける必要はないのです。いつでも自由です。自発的に自分からやるのです。想像してみてください。愛し合っている恋人がいます。ラブレターを書かなければいけないなんていう約束をしなくても、契約を結ばなくても、ルールを決めなくても、愛し合っている恋人同士ならばいくらでも何ページでも恋文を書きます。言われなくても、命じられなくても、愛し合っているならば、ルールは要りませんね。愛し合っている夫婦ならば、「夫は妻を殴ってはいけない」なんていうことを決められなくても、法律で定められなくても、愛し合っている夫婦ならばルールは要りません。愛し合っている親子ならば、「子どもにしっかりとご飯を

食べさせなければいけない。子どもに虐待を加えてはいけない。」そんなルールは要らないわけです。愛し合っている親子ならば、ルール・縛りは不要なわけです。そこには自由があります。「もっとしてあげたい。だって相手を楽しんでいるから。相手の喜ぶことをもっとしてあげたい。私は愛しているから。そんなこと、あんなこと、いちいち言われなくても、禁じられなくても、いくらでもやりたい。」それが愛の関係です。それは律法主義から来る奴隷根性から来るものではないのです。

次に 8 節に目を移して下さい。『しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした。』イエス・キリストを知る前、私たちは確かに奴隷でしたけれども、ここでは「本来は神でない神々の奴隷」であったとパウロは言っています。この「本来は神でない神々」というのは勿論偽りの神々、偶像のことです。私たちは偶像礼拝の虜だったわけです。偶像に仕える、偶像の奴隷だったわけです。ユダヤ人においては、それは先祖伝来の宗教です。ユダヤ教徒は「勿論聖書の神、イスラエルの神を信じている。」と公言はしていましたが、実際には彼らは自分たちの造った神、「この神が私たちをエジプトから上った神である。」と金の子牛をこしらえて、「この神こそが我らの主、ヤーウェである。」勝手に自分たちがイメージした神を拝んでいたわけです。「自分たちの神は割礼を受けなければ祝福を与えてくれない、救ってくれない神。」だとか、「自分たちの神は細かい律法の規定を守り行なわなければすぐに罰して、そして滅ぼしてしまう恐ろしい神である。」とか、勝手なイメージを作って、勝手な神観を持って。聖書の言葉は使います。「神を信じている。」とは言います。同じように私たちも「神を信じている。」と言います。「イエス・キリストを信じている。」と言います。でもそれぞれの神観が全く異なれば、それは異宗教ということになります。同じ聖書を使っているユダヤ教とキリスト教は全然違います。同じ聖書を使っているエホバの証人と正統派のキリスト教は全然違います。同じ聖書を使っているローマ・カトリックとプロテスタントは全然違います。同じ聖書を使っているリベラル派(エキュメニカル派とも言います。)と、そして聖書主義の福音派では全然違うわけがあります。ともすれば私たちも聖書から外れて、宗教用語は使いながらも、聖書のボキャブラリーを使いながらも、全く違う神々を信奉しかねないということ、偶像礼拝にいつでも私たちは陥ってしまうということも覚えなくてはなりません。でも、クリスチャンになる前は、まさに文字通り私たちは偶像に仕えていたわけです。日本人であればもう多神教の土壌ですから、ありとあらゆる先祖伝来の宗教、昔ながらのしきたり・習わしに私たちは振り回されていた、縛られていたわけです。何も考えずにその中に浸りこんでいたわけです。「先祖伝来、昔からそうだったから。昔からうちは仏教。昔からうちは神道。うちには仏壇もあるし、お墓はお寺にあるし、神棚も祀^{まつ}ってある。うちは氏子総代の家系だ。」とか、いろんなことを私たちは何も知らずに、分からずに、昔からそうだったからというだけで縛られていたわけです。囚われていたわけです。そしてそれらの風習に私たちは従っていたわけです。そうしなければいけないと思っていたわけです。意味も価値も分からなかったわけですから、こうでなければならないという何かある種の強迫観念のような、もしくはマインド・コントロールのようなものを受けていたわけです。日本人であれば、死んだらみんな葬式は仏式であると。悪いとも思いませんし、それが当たり前。昔からやってきたこと、みんながやっていること。葬式仏教の国であります。わけの分からない意味不明なお経をあげてもらったけれども、有り難いと言って法外なお金を支払うわけです、お布施をするわけです。そうしなければ供養出来ないとか教え込まれているからであります。仏壇を守らなければ先祖に失礼だとか、何も考えずにそれが長男の務めだとか言われて私たちはそれを仕方なく渋々マイホームにわざわざ仏間を設けたりするわけであります。ここではそのルーツを詳しく話す事は致しませんけれども、すべての家庭に元々仏壇があったわけではないということを知って頂きたいと思えます。それは徳川幕府のキリシタン弾圧制度から生まれたもので、すべての家に仏壇がなければキリシタンと見なされるので、これは強制されたものです。昔からではないのです。つい最近と言っても良いかもしれませんが、いずれにしても何も考えずに、その意味も価値も分からずに私たちはそれを守り行ってきた。ある種ここでは「神々の奴隷であった」と言っているわけです。

そして、9 節 10 節にも目を留めて下さい。『ところが、今では神を知っているのに(まことの神、聖書の神を知っているのに)、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新た

にその奴隷になろうとするのですか。¹⁰ あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。『各種の日』というのは例えばユダヤ教であれば七日目の安息日、それが特別であると。月であるならば新月と呼ばれるもの。季節であれば春の過ぎ越しの祭りとか、初夏の7週の祭り、ペンテコステの祭りとか、秋の仮庵の祭りといった例祭と呼ばれるもの、季節ごとのお祭り。年と言うならばそれは7年毎の安息日ならぬ安息年とか、50年毎にすべての負債が免除されるヨベルの年とか。特別な日だとか月だとか季節だとか年というのがあって、それを彼らは守ることに生き甲斐を覚えていたわけです。表面的に勿論守っていたわけです。儀式的に便宜的に機械的に守っていたに過ぎません。その意味も価値も分からずに、ただそれは昔から定められていたことだからと。それはユダヤ教徒であればそのように守り行ってきたわけです。そして守り行ってさえいけば、祟りに遭わないとか、呪われぬとか、祝福を受けるとか、救われるとそのように彼らは捉え違っていたわけでありました。

そして、私たち日本人も勿論このような各種の日、月、季節、年といったものにずっとこだわったり、または捉われてきたわけでありました。例えば日本には“六曜”と呼ばれるものがあります。仏滅だとか、大安だとか、友引では火葬出来ないとか、いろんなことを私たちは教え込まれて、それがそうあるべきだと、こうあるべきだということで私たちはそのような根拠のない迷信というものを植え付けられてきたわけでありました。厄年もそうです。男であれば25歳。私は25歳の時に結婚しました。全然厄年に結婚したなんて何も気にならないですけれども、でもある人たちは非常に気にします。42歳、一般的に言うならば今年私は厄年ですけれども、「何か災いが起こるのではないか。特に42歳は最大の厄年。悪い事が起きるんじゃないか。」とか。イエス・キリストが戻って来られるのを私は楽しみにしているだけなんです。そのようにしてくだらないわけですけれども、何も私たちは考えずに、それが昔からそうだったからということだけで受け止めてきたわけです。そしてそれらに縛られ振り回されてきたわけです。でもそんなものに私たちはもはや逆戻りしないと。「再び新たにその奴隷になろう」なんて考えるはいけません。そんな窮屈な、そんな不自由な生活は送る必要はないわけです。

ところがそのようなこの世の幼稚な教えが残念なことにガラテヤの教会、そして今日の教会の中にも、伝統的な教会の中にも入り込んでしまっているわけです。11節のところに『あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないかと私はあなたがたのことを案じています。』こうでなくてはならない、こうしなければいけない、これはしてはいけない、あれはしてはいけないというその律法主義の、または儀式主義、戒律主義、そうしたものの縛りというものが教会の中にも残念ながら持ち込まれてしまっている。そしてそれを守っているうちは安心であるとか、それらを守っているうちは敬虔に生きているというふうになんか思ってしまうわけなんです。それは恵みを全く無駄にしてしまうという行為であります。具体例で言うならば、ここでは「割礼を受けなければ救われぬ。」と言っていますけれども、教会では「洗礼を受けなければ、バプテスマを受けなければ救われぬ。」とか。またはローマ・カトリックにおいては7つの秘跡、 sacrament を行なわなければ救われぬとか。それは完全にこの世の幼稚な教えから来ているもの。実際にローマ・カトリックのありとあらゆる風習の中に特別な日だとか、月だとか、季節だとか、その時にはいろんな儀式を行い、その時にはいろいろな色を身につけ、いろいろなローブを着たり、キャンドルに火を灯してみたり、または香を焚いてみたり、全部それは異教から来ているものです。クリスマスもそうです。イースターと呼ばれるその呼び名もそうです。全部異教から来ているものです。勿論それをキリスト教の意味において祝うならば、それは必ずしも偶像礼拝とはなりませんけれども、でもその日が他の日に比べてより大切であるとか、より重要であるとか、その日さえ守っていればそれで充分だとか、そういう考えは完全にこの世の幼稚な教えというものであります。

12節。『お願いです。兄弟たち。私のようになってください。私もあなたがたのようになったのですから。あなたがたは私に何一つ悪いことをしていません。』パウロは生粋のヘブル人、ユダヤ人、元パリサイ人、律法学者、サンヘドリンの議員でありました。ですから本来は最も律法に厳格な人だったんですけれども、でもイエス・キリストに出会って、目からウロコの体験をして、彼はキリストにある自由を得たわけです。恵みによって救われた者は、キリストにある自由を満喫することが出来ます。ですからもうこれまでに縛られていた幼稚な教えから完全に解放されて、そして彼は食物規定にも勿論縛られていなかったわけです。先に見たようにペテロは再びこの世の教えに戻って、逆戻りし

て、そして割礼派の人たちにおもねるようにして思わず食物規定にならって異邦人とは一緒に食事をしない。異邦人の食べるようなものは食べないなんていう過ちを犯して、首尾一貫性のないそのような偽善の罪に陥ってしまったわけですが、パウロはそんなことはしないんだと。「私はあなたがた、すなわちガラテヤ人と同じように、異邦人と同じように彼らと同じ釜の飯を食うのだ。もう食物規定等には縛られない。私はユダヤ人だけれども、私はもはやユダヤ教の教えには、規定には従わない。私には自由がある。きよくされた者にはすべてはきよいのだ。」という、そのキリストの教えに彼は常にのっとって行動したわけであります。ですから「私のようになってもらいたい。」とパウロは言ったわけですが、そして『あなたがたは私に何一つ悪いことをしていません。』と 12 節にありますけれども、パウロに対してガラテヤの人たちは何も悪いことはしていないわけです。パウロはユダヤ人なので、自分たちが食べる所謂きよくない汚れた食べ物を無理矢理食べさせて、パウロに嫌な思いをさせるとか、パウロが気分を害するようなことをさせるとか、そんなことは一切ないと。「あなたがたと交わり、それを大いに私は楽しんでいるし、喜んでいて、別に食物規定に反したようなことがあったとしても、それでも私は何も悪い気分をしていない、持っていない。」と。先にペテロは割礼派の人たちに惑わされてしまって、彼らにおもねるようにして異邦人と一緒に食事をしなかったり、そういうことをしましたけれども、パウロは全く悪い気分を持っていなかったということです。嫌な感情は一切持っていなかったということです。

そして同時にパウロのこの手紙を通してガラテヤの人たちは非常に厳しい言葉が並んでいますので、パウロは自分たちのことを非常に悪く思っているのではないかと、恨んでいるのではないかと。あまりにも語調が厳しいので、ここに書かれている言葉があまりにも辛辣ですから、嫌われているじゃないかという誤解もしていたかもしれません。そういったことも踏まえてパウロは「一切あなたがたは私に対して悪い事はしていない。あなたがたのことを悪く思っているのではない。」と。

13 節の方に目を移して下さい。『ご承知のとおり、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。』“**肉体が弱かった**”というのは、パウロの健康がいつも優れなかったということです。いつも病弱だったということです。特に小アジアという今日のトルコの地方をずっと宣教している中で、その小アジア特有の風土病にかかったのではないかと。マリア熱といったものがよく聖書学者の間で指摘されますけれども、そういった風土病にかかって、マリア熱のようなものにかかって、そして後遺症持ってしまったのではないかと。身体に障害を負ってしまって、そしてそれが繰り返し繰り返し症状として現れてしまったのではないかと指摘されて、パウロの宣教はいつもエネルギーで彼は 5 体満足の健康体のように皆さんイメージしていたかもしれませんが、常にパウロは肉体の弱さを覚えて、そして“**肉体のとげ**”とも彼は表現していますが、それを 3 度も取り去って下さるように、癒して下さるように祈ってはみたくはありますが、でもこの祈りはむしろパウロが期待していたとは全く違う形で応えられました。パウロの弱さの中にキリストの完全な力が現れると。「だからあなたにはもう恵みが十分だから、もう思い煩わなくていい。この肉体のとげを持ったままでいい。それによってあなたは高慢にならずに済むし、キリストの完全な力がむしろ現されるのだから喜ぶべきだ。」と、そのような祈りの答えが与えられてパウロはそれを素直に喜んで受け入れたわけであります。おそらくパウロはこの小アジア特有の風土病、おそらくはマリア熱のようなものにかかって、その結果身体に障害を負って、そして繰り返される症状に悩み苦しんでいたということが考えられます。ちなみにそのマリア熱というのはどういった症状なのかということが皆さんにイメージがつかないと思うので、実際にこういうものだというふうな感覚を少し分かちたいと思います。それは真っ赤に焼けた鉄の棒を額に突き刺すような痛みであると。または歯科医の用いるドリルでこめかみに穴を開けるような痛みであると。もうそれだけ聞くだけで耐えられそうもないような痛みというふうに感じますけれども、皆さんもいろいろな病気や後遺症やハンディキャップを抱えているかもしれません。私は偏頭痛がありますとか、もう割れるような、バットで殴られるような、そういう頭痛を抱えているんですとか、いろんな痛みや苦しみ、いろんな症状を抱えていますと言うかもしれませんが、そのことを神様に癒して下さいと祈る事は間違いではありません。ただ癒しが必ずしも神様の御心とは限らないということです。そして癒しが必ずしもあなたにとってベスト、最善であるとは限らないわけです。神様はむしろ癒し以上の祝福を与えたいというふうにも願う

お方であります。パウロからしたらそのようなハンディキャップは宣教においては負担になるのではないか、宣教のハードルになってしまうのではないか、健康体だったらもっと沢山、もっと時間をかけたり、もっと遠くへ行けたり、もっと力強くパワフルに宣教出来るのではないかと思いがちですけれども、でもむしろ神様は、「肉体のとげは、病気は抱えたままで良い。その方がかえて良い。」むしろパウロが凄いいからではない。そのパウロの病気の中でも、弱さの中にあってもキリストの完全な力が現わされる。そのことですべての栄光が神に帰せられる。だからパウロにおいては病気は癒されない方が良いと。それが神様の判断であったわけです。ですからパウロの宣教は、パワフルなイメージを皆さん抱くかもしれませんが、彼は常に真っ赤に焼けた鉄の棒を額に突き刺さされるような痛み、歯科医の用いるドリルでこめかみに穴を開けられるような痛みを抱えながらの宣教活動だったということを感じて欲しいと思います。「今日はちょっと頭痛がするので教会休みます。」とか、「今日は頭痛がするので、聖書を読めません。祈れません。宣教なんかとてもじゃないけれども、キリストの事なんか証しなんか出来ません。だって頭が痛いんですから。」と私たちは思います。勿論休んじやいけないとか、死んでも宣教しなさいとか、教会に来なさいとか、そういうことを言っているわけではありません。そういう極論に走らないで頂きたいと思うのですが、ただ主に祈っても癒されないならば、それはそれでよしとして平安を受けて頂きたいと思います。そしてその上で、そのまま神はあなたを用いて下さるということを感じて欲しいと思うのです。このハンディキャップがあるから出来ない、ではないのです。このハンディキャップがあっても、あなたには出来るということを神が承認されたということです。癒されなければ出来ないのであれば神は癒します。でも癒されなくても出来るならば、神は敢えてそうするというような選択もある、そういう計画もある、そういう道もある、そういう方法もある。勿論タイミングの問題もあります。今癒されないだけで後に癒されるかもしれません。その辺は私たちは神様にお任せするわけです。私たちは目に見える世界で、有限の世界でしか、時間の制約を受けた中でしか物事を見ることも判断することも決めることも出来ませんので、私たちはすべてをご存知の永遠の神にゆだねるわけであります。私たちにとって最善のことしかなさらない、その慈愛に満ちた完全なる父にすべてをお任せするわけです。

14 節の方に今度は目を移して下さい。『そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあつたのに、あなたがたは軽蔑したり、きらったりしないで、かえて神の御使いのように、またキリスト・イエスご自身であるかのように、私を迎えてくれました。』パウロが病弱で身体に障害を負っていたというだけで見下す人もあつたわけです。「キリストの使徒ならば完全無欠な五体満足の健康体でなければならない。神に祝福されているならば全て病気からもフリーで健康体で病気には一切かからない。信仰があれば病気は治るんだ。信仰がないから病弱なんだ。だから病弱なパウロは信仰がない。キリストの使徒としてはふさわしくない。」とか、そのように見下す者もあつたということです。またパウロのそうした病弱な弱々しい姿が如何にもみすばらしいということで見下げた人たち、キリストの使徒としての權威を認めなかった人たちも実際にあつたということ、これを私たちは**コリント人への手紙**で見ることが出来ます。たとえば**第二コリント 10:10**『彼らは言います。「パウロの手紙は重みがあつて力強いが、実際に会つた場合の彼は弱々しく、その話しぶりは、なっていない。』』『パウロの見た目が威厳がない、外見があまりにもみすばらしい。むしろ偽使徒たちの方がはるかに立派で威風堂々としていて雄弁で勇敢で力強く、この人たちの方がよほどキリストの使徒っぽい。パウロを見たら嘆かわしい。みすばらしい。こんな弱々しいのは、見た目も格好良くないし、カリスマ性なんかないんだ。』と、それだけで見下されるという非難を受けているわけです。

またもうひとつ覚えて頂きたいのは、この今読んだ**ガラテヤ 4 章 14 節**のところには、パウロにとつても勿論これは肉体の病、ハンディキャップというのは試練だつたんですが、ガラテヤの人たちにも試練だつたとあります。これはどういう意味でしょうか。パウロにとつても試練であるのは分かります。つらい症状、つらい後遺症、つらい痛みや苦しみ、体の弱さ不自由さ、それが試練である事はこれはもう説明が不要だと思いますが、ガラテヤの人たちにおいてなぜこれが試練なのか。パウロの面倒を見なければいけなかつたからか。パウロのその症状を和らげるために薬代を沢山彼らは支払わなければならなかつたのか。不自由な分いろいろと支えをして実際に介護するようなこと、パウロの手となり足となりいろいろな身の回りの世話も負担しなければいけなかつた。そういうことも考えられます。でもそれだ

けではなくて実際に見た目があまりにもひどかったということです。見ただけでちょっと目を背けたくなるようなひどい姿だったと。マラリア熱によって冒されるともう目が真っ赤になってちょっと気持ち悪いわけです。よくアレルギーで目が真っ赤になる人もいますけれども、「こんな姿見せられない。恥ずかしい。不快な思いを与えたくないから。」とか思うかもしれませんが、パウロはまさにそういう見た目だったわけです。「ちょっと気持ち悪い。気分を害してしまう。」それはあなたがたにとって試練であったと。ですからそういうことも皆さんに覚えて頂きたいと思います。それでもパウロは神に用いられたのです。「私は病弱だから。私には身体障害があるから。私の見た目はみすぼらしくて、人の目に、教会の人たちの目にあまりよく映らない。むしろ気持ち悪いと思われてしまう。だから私は神に用いられないんだ。私は控えるべきなんだ。」とか、勘違いも甚だしいということ覚えて頂きたいと思います。むしろパウロは神の御使いのように、イエス・キリストご自身であるかのように迎え入れられました。それが教会でなければならないということです。あなたが病気持ちでも、あなたが身体障害者でも、あなたの見た目がどうであれ、目が真っ赤であれ、どんな見た目だとしても、^{あざ}瘡があろうと傷があろうと髪の毛がなかるうと、関係ありません。私たちはイエス・キリストの教会ですから、イエス・キリストが私たちを無条件でありのままに受け入れて赦して愛して下さったように、私たちもそのようにすべての人をこの教会においては迎え入れたいと思いますし、迎え入れるべきなんです。決して見た目で判断してはいけません。決して自分の健康状態において卑屈になったり悲観したりしてはいけません。私のような者はとか、見た目で判断してもいいけませんし、それは人からの判断もそうですけれども、自分自身の判断も誤ってはいけないということです。

マタイ 25 章 34～40 節もメモをしておいて下さい。『³⁴ そして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。³⁵ あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、³⁶ わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』³⁷ すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。³⁸ いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。³⁹ また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』⁴⁰ すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』旧約時代においてそれが御使いとは知らずに旅人をもてなすということがよくありました。“主の使い”旧約聖書ではそれは受肉前のキリストを指していました。その旅人が空腹だった時、その旅人が困っていた時、もてなしをする。ご馳走を用意したりとか、信仰の父と呼ばれたアブラハムは確かにそうしたわけです。またマタイの 25 章においては、イエス・キリストに仕えるように私たちは人々にも仕えるべきであって、特にそれは患難時代においてユダヤ人に対して親切にすることが、後にイエスによって報いてもらえる。ユダヤ人を祝福する者は祝福され、ユダヤ人を呪う者は呪われる、というアブラハム契約に基づく教えでありますけれども、マザーテレサはこれを現代的に適用してインドの貧しい人たちに仕えたわけです。イエス・キリストであるかのように仕えたわけです。そのように実際的に私たちはこのマタイ 25 章を適用することも出来ます。イエスのように私たちはお互いを迎え入れるべきであると。歓迎すべきである、もてなし合うべきであるということです。

そして 15 節。『それなのに、あなたがたのあの喜びは、今どこにあるのですか。』あの喜びは、救われた時のあの喜びは。「こんな者でも救って頂いたんだと。何の根拠もないのに、なぜ私が救われたのか分からないけれども、でも私は恵みによって救われました。こんな汚い罪人の私が無条件で受け入れてもらえた、赦してもらえた。愛して頂いている。素晴らしい。」その救いの喜びは一体どこへ行ってしまったのですかと。今あなたには喜びがあるでしょうか。「多少はありますよ。でもイエス・キリストを信じたあの時の方がもっと喜んでいました。」と言うならば、あなたは完全にバックスライドしています。信仰においては霊的に後退しているということです。むしろクリスチャンは救われた時よりも、もっと喜んでいなければいけない。1 年経ち、5 年経ち、10 年経ち、その喜びが段々薄れていくようであれ

ば、あなたの信仰は後退しているということです。本来であればあなたのその喜びは救われた時よりもはるかに豊かなものとなっていなければ嘘だということです。あなたの喜びは必ず成長する、拡大する、もっと深いものになる、もっと大きいものになる、もっと豊かなものになる。それがクリスチャンライフというものです。その喜びが後退しているならば、薄れているならば、あなたは完全にバックスライドしているということです。

そしてその理由・原因は何なのか。ひとつには律法主義が考えられます。「信じるだけで救われた。ハッピーハッピーだったのに、今は律法主義によって、あれもしなければいけない、これもしなければいけない。」喜びは失われていくわけです。バイブル・ナビという聖書の注解を記した聖書が日本語で出ております。英語の application Bible というものの日本語訳なんですけれども、そこにこのような解説がありましたので、よくまとまっていたので今皆さんに 4 ポイント紹介したいと思います。『**律法主義というのは愛されていると感じるよりも責められていると感じる。**』救われた当初は愛されていると感じていたのに、救われてからしばらくして今の私はクリスチャンとして責められているように感じる。であるならばあなたは律法主義の下に、律法の下にあるということです。律法主義に生きているということです。それが第一ポイントです。**律法主義は愛されていると感じるよりも責められていると感じる。**

2 番目は、『**律法主義は謙遜ではなくて自己嫌悪を生じさせる。**』自分が嫌いだというその自己嫌悪、「自分はダメだ。できていない。」勿論それは謙遜でもあるんですけども、でも謙遜という健全な意味ではなくて、不健全な意味で「自分はできていないから、ダメだから、自分のことが嫌いなんだ。」と、自己嫌悪です。**律法主義は謙遜ではなくて自己嫌悪を生じさせる。**

3 番目のポイントは、『**律法主義はどのような関係にあるかよりも、何を行ったかを強調する。**』“アバ、父”と呼ぶ素晴らしい美しい愛に満ちた親密な父との関係・交わりよりも、自分がキリスト者としてどんなことをやったのか、どんな奉仕をしたのか、どれだけ献金をしたのか、どれだけ奉仕をしたのかというその行いを強調するようになります。ですから神様にどれほど愛されているかよりも、自分がどれだけのことをしたのか。あなたの口からそのような事ばかり出てくるのであれば、あなたは既に律法主義にとらわれているということです。また人からそのようなことを聞いたならば、その人は律法主義にとらわれているということです。

4 番目のポイントは、『**律法主義はどのようになることができたかよりも、どれほど及んでいないかを指摘する。**』「自分は全然できていない、なっていない。」「でもあなたでもできたことがあるじゃないですか。そのあなたのできた事はあなただからできたのではない。神の愛によったからできたんだ。」と。如何にもすべては自分の力・知恵、自分の思いつき、自分の能力によって成し遂げたかのように思っているかもしれません。でもそれは律法主義です。できていないことを、自分の能力が足りないから、自分に経験が足りないから、自分に頑張りが足りないから、自分の意志が弱いから。そのように指摘するのは律法主義です。「**責められているように感じて、不適當であると感じるならば、あなたの焦点がフォーカスがどこにあるか確認しようではないか。**」と、このバイブル・ナビの解説は適用するように勧めております。今あなたは責められているように感じているでしょうか。「自分は如何にも不適當だ、なっていない、相応しくない。」と思っているでしょうか。そのように感じているならばあなたのフォーカスがずれているということです。あなたの焦点が間違っているということです。今それを確認して頂きたいと思います。あの喜びは一体どこへ行ってしまったのですか。『**喜びなさい。いつも喜んでいなさい。**』言われなくても、と私たちは切り替えさせるのでしょうか。言われなければすぐ忘れる。あの喜びを取り戻さなければなりません。律法主義を後にしなければいけません。この世の教えを捨て去らなければいけません。逆戻りしていたならば、もう一度恵みの下に戻って下さい。

15 節の続きを見たいと思います。『**私はあなたがたのためにあかししますが、あなたがたは、もしできれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思ったではありませんか。**』ガラテヤの人たちはパウロのことを本当に愛していたわけです。「できれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思った」これを比喻で捉えるならば、“**自分の目をえぐり出して与える**”というのは、自分のすべてを与えるという意味でもあります。でもこれを文字通り捉えるならば、パウロはこの小アジアの、このパンフリヤ地方の風土病、すなわちマラリア熱か何かで視力をだいぶやられてしまって、視界がぼやけてしまう。実際に **6 章 11 節**のところを見て頂くと、『**ご覧のとおり、私は今こんなに大きな字で、自**

分のこの手であなたがたに書いています。』これはパウロの視力が弱かったことを表しています。病気の後遺症、それは弱視。自分では字が書けなかったわけです。ですから常に口述筆記で誰かに書いてもらわなければいけなかったのですが、「でもこの手紙だけはどうしても私自身の手で書きたい。でも目が悪いから小さな字は書けない。極端に大きな字でなければ書けない。」それが病気の後遺症だったのかもしれませんが。若しくはパウロは何度も何度も迫害に遭って、実際に石打ちにされたり、殴られたり、鞭打たれたり、いろいろな暴行も受けているわけです。そのような暴行によって視力を失ってしまったのかもしれませんが。ちょうどボクサーがパンチドランカーという状態で、殴られすぎてボコボコにされてしまったので目を悪くしてしまう。そういうこともあるわけです。いずれにしてもパウロの目が悪くて、そしてガラテヤの人たちは自分の目を差し出したいと。「この目を使って下さい。」と、それほどまでにガラテヤの人たちはパウロのことを敬愛していたと。なのにそのパウロの教えを後にして、後から来た偽教師たち、偽兄弟たち、割礼派の律法主義を、行為義認を教える人たちのその教えに奔ってしまったのは、なんと悲しいことかと。あの喜びは、自分の目をめぐり出して与えてもいいというほどの熱烈なものだった。それほど喜べた。でもその喜びはどこかへ行ってしまって、「パウロなんか要らない。この新奇の教えの方がもっと聞こえが良い、耳障りが良い、もっと分かりやすい、受け入れやすい。」と。でもパウロから言わせれば「それはこの世の幼稚な教えであって、むしろそれらは喜びを奪い去ってしまうもの、自由を奪い去っている。むしろ縛りを与えて不自由にしてしまうもの。完全に喜びを奪い去ってしまうものである。」と。喜びがなくなってしまっているならば、今縛りを感じて窮屈に思っている人。「クリスチャン生活を送る中で何か自由な解放された気持ちよりも、何か縛られている感じがする。何か嫌気を感じてしまっている。倦怠感を感じてしまっている。何となく流されてしまっているように感じる。なんか儀式的で機械的で形骸化されてしまったような、そんなクリスチャンライフを、そんなドライな生活を今、教会生活を送っているような感じが今自分の中にあります。」という人があれば、あなたは間違いなく律法主義に片足を突っ込んでいるということです。しっかりとそこから離れて頂きたいと思います。逆戻りしないように、もう一度恵みの下に戻って、フォーカスを恵みにおいて頂きたいと思います。この教会はマラナサ・グレース・フェロシップです。『主よ、来て下さい、恵みのフェロシップ』です。律法主義のフェロシップではありません。聖書を一生懸命学んで熱心な人たちのエリート集団ではないのです。私たちがこのように熱心に聖書を学べるようになったのは、あなたの頑張りではありません。私の能力ではありません、指導力ではありません。それはすべて恵みによるものであります。

16 節に『それでは、私は、あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。』パウロは真理を語って、その真理を知ればガラテヤの人たちは真理によって自由になる。律法主義の縛りから解放されると願ったわけですがけれども、しかし真理というものは、まさに御言葉は真理であって剣であるようにグサとくるわけです。痛みが伴うわけです。触れられたくないところに触れてくるわけです。入り込んできて欲しくないところに入り込んでくるわけです。ですからどうしても反発を買うわけです。「真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。」パウロは勿論ガラテヤの人たちを真理の剣で刺し殺す、そして滅ぼすというような意図は全くなかったわけです。でもガラテヤの一部の人たちからすると「この真理は聞きたくない。耳障り良くないから。むしろグサとくるから。」だから反発するわけです。

17 節。『あなたがたに対するあの人々の熱心は正しいものではありません。彼らはあなたがたを自分たちに熱心にならせようとして、あなたがたを福音の恵みから締め出そうとしているのです。』ガラテヤの人たちに対するあの人々の熱心の“あの人々”というのは、言うまでもなく偽教師、偽兄弟、かき乱す者たち、割礼派の人たち、律法主義を説く人たち、異端教師ということです。彼らは熱心だったんです。これが実は偽教師たちの特徴であります。偽教師と聞くと悪いイメージを持ちますから、とても良いイメージは持たないかもしれませんが、しかし偽教師というのは実は良いイメージなのです。彼らは熱心なのです。見た目は実に立派です。それと比べてパウロは、見た目はできていない、なっていない。偽教師たちは立派なローブを着ている。ネクタイを締めてスーツを着ている。その一方であんなみすばらしい格好をして、あんなジーンズを履いて、髪の毛も薄いし、あんな若造に。それが一般的な認識かもしれませんが、つつい熱心で見た目が立派でそういう人たちの言うことの方が正しくて間違いないと私たち

は見た目から入るかもしれませんが。でも聖書によれば『人はうわべを見るが、主は私たちの心をご覧になります。』見た目に惑わされてはいけません、騙されてはいけません。立派な教会、聖堂、大聖堂とか。見た目が立派な牧師だとか聖職者、そういう人たちは往々にして皆律法主義者とは言いませんけれども、でも律法主義のところが多いということです。そして彼らは実に熱心です。カルトもそうです。教祖と呼ばれる人たち、新興宗教、新々宗教、カルトというグループも非常に熱心です。熱心にピンポンとしてくるわけです。「一緒に聖書を学びませんか。」と、一生懸命聖書を学ぶことを勧めてくるわけです。「この冊子を読みませんか。」一生懸命勧めてくるわけです。そして彼らは実に見た目は良い人です。熱心な人たち、親切そうな人たち、親身になってあなたの話にも耳を傾けてくれます。そしてあなたのことを褒めてくれます、認めてくれます。沢山の愛のシャワーを浴びせてくれるわけです。love shower と俗に言います。それはカルトの手法です。カルトの特徴であり手法。それは熱心であって、そして love shower をあなたに沢山かけてくれます。あなたのことを気にかけて心配して、そしてあなたのために親身になっていろいろと身を乗り出すようにして相談にも乗ってくれます。そしてあなたに聖書を教えてくれようとしています。若しくは彼らの言うところの真理、神の教え、それにあなたを招こうとします。でも、それらの熱心は間違いだと言っています。正しくない。なぜならば、その熱心は自分たち熱心にならせようとするものであると。神に対してではありません。自分たち、そのカリスマ性のある教祖的な人物、若しくはその団体・組織に対して熱心にならせようとする。それは間違いの熱心であるということです。彼らは熱心に勧誘しますが、また熱心に彼らの教えを説き、そして熱心にあなたの言うことに耳を傾けてくれるかもしれませんが、それはあなたを取り込むためであるということです。あなたを組織の一員として構成員とするためです。そしてあなたが信じたならば、もうそれで love shower は終わりです。信じるまではいっぱい love shower を浴びせてくれますけれども、信じた途端に「もうあなたは信じたのだから、これをしなさい。あれをしなさい。あなたはもうこのメンバーなんだから。会員なんだから、組織の一員なんだから、だからあなたも私たちと同じようにやりなさい。」と、まさに奴隷化ということです。忠実な熱心な労働者としてただ働きをさせるためです。信者を獲得するのは組織を拡大するためであります。それは自分たち熱心にならせようとする正しくない熱心さです。これに惑わされてはなりません。

18～20 節を今度は読みます。『¹⁸ 良いことで熱心に慕われるのは、いつであっても良いものです。それは私があるあなたがたといっしょにいるときだけではありません。¹⁹ 私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。²⁰ それで、今あなたがたといっしょにすることができたら、そしてこんな語調でなく話せたらと思います。あなたがたのことをどうしたらよいかと困っているのです。』パウロの熱心は彼らの熱心とは全然違いました。パウロの熱心は自分に対して熱心にならせようとする、パウロの必要に応えさせようとする、パウロの生活を支えようとする、パウロの病院の医療費を払わせようとする、そういうものではなかったということです。パウロの熱心さはむしろガラテヤのクリスチャンの一人一人がイエス・キリストの似姿に変えられるように。そのためにはパウロは寝る間も惜しんで昼もなく夜もなく涙を流しながらキリストの福音を語り続け、そして彼らが霊的に恵みの中で成長することだけを望んだわけです。第一コリント 4 章 15 節も目を留めて頂きたいと思えます。『**たといあなたがたに、キリストにある養育係が一人あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。**』パウロはガラテヤのクリスチャンたちも霊的に言わば生んだわけです。勿論すべてのクリスチャンの真の父は、天におられるアバ父でありますけれども、でもパウロはそのアバ父のようにして、ちょうど地上の生物学的な肉の父親が天の父の代表であるかのように、パウロという教会の牧会者も天の父を表すものとして、父の代理としてガラテヤの、またすべての彼が開拓した教会のクリスチャンたちを子どもと呼んで、その子どもたちを養育するように心を込めて心血を注いで、自分が病気で大変でもありとあらゆる犠牲を払って育てたわけでありました。それが真の霊的指導者、牧師の姿であります。如何に教会員に伝えさせようか、如何に教会員から献金を巻き上げようか、ではないのです。如何にコキ使おうか、如何に自分の名を知らしめるために有名にするために教会員を沢山使って教会に人を集めて、大きな教会にして立派な教会堂を建てれば、それで自分の名誉となるわけですから、そのために熱心になる人たちも多いわけです。でもそれはパウロに

言わせれば、教会をかき乱す者、偽兄弟、偽クリスチャンだと、偽牧師だと言っているわけです。パウロのミニストリーのゴール、それが先ほど読んだガラテヤの4章19節の言葉です。『**19 私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。**』キリストへ導いたら、クリスチャンになったら、それで終わりではないのです。教会員になったら、それで終わりではないのです。洗礼を受けたら、それで終わりではないのです。そこから育てるといふ大変な作業と言いますか、苦勞というものが伴うわけです。皆さんも子育てをしているわけですからお分かりになると思います。産む時も大変でした。でも産む時よりももっと大変なのが子育てであります。少なくとも成人するまであなたは責任を持って自分の子どもを育てるわけです。親として、天の父を表す者として、神の代理者として、神から預かったこの大切な子どもを育てるのです。沢山の苦勞が伴います。自分の時間なんかありません。子どもは泣けば、夜中であろうと起きます。子どもが困れば、ひざまずいて子どもの目線で子どもを理解するように、受け入れるようにして子どもの話を聞きます。「俺の言うことを聞け。言う通りにしろ。」と、ただ力づくで上から目線で「誰に食わせてもらっているんだ。」と脅しながらしつけるのではないです。それはただの虐待です。時には鞭を持って尻を叩いて、スパイク棒で叩かなければいけない時もあるかもしれませんが、それでもあなたは子どもを愛するが故に。子どもも痛いのです。でもスパイクする時は、尻を叩く時は親も痛いのです。それでも痛みがあろうとも、子どもにどのように思われようとも、嫌われようとも、それでも子どもに成長してもらいたいから。牧会者も同じです。教会員に好かれようとするならば、耳障りの良いことしか言わなければいいわけです。何も厳しいことを言わない、何も叱らない、人気を取ればいいわけです。でも、それでは子どもは育ちません。キリストが形造られるためには、しっかりと真理を語らなくてはなりません。イエスは「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。**」と言われましたけれども、イエスが形造られるためには、真理は不可欠です。そして時に真理は痛いのです。反発も買います。嫌がられます。煙たがられます。嫌われます。「ここに来るといつも厳しいことを言われる。責められるように感じる。」あの牧師は律法主義者だと揶揄されることもありますけれども、でも同時に覚えて頂きたい事は、もしあなたが律法主義者ならば、あなたは誰の言うことでも責められているように感じると思います。ですから是非私たちは神の恵みにすがって、そして既にキリストにあって自由であるということ。ですから私たちは、自発的にこの真理に従うように、強制されてではなく、そうしたいし、そうすべきだということが充分分かった上で強制されずに私たちは従うわけです。自分にとって都合の悪い事でも、肉的にはそれが不都合なことでも、自分の予定や都合に合わない事でも、それでも私たちは従うわけです。従いたいからです。

コロサイ1章28節もお読みしたいと思います。『**私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。**』未熟なままで良いと思う親はいません。子どもは皆成長して成人になって、そしてしっかりと自分の足で立って欲しいと。それがすべての親心であります。いつまでも20歳過ぎても30代になっても40代になっても50代になっても60代になっても、よく言われたパラサイトシングルみたいにして親のすねをかじりながら、親の年金を食いつぶすようにして、そしていつまでも親に依存する。勿論ときには親の力を借りなければいけないほど苦しい時もあるでしょう。でも未熟なままでいいということはないわけです。ですから私たちも成熟を目指して信仰生活を続けるべきで、いつまでも依存しなければいけないとか、いつまでも未熟なまま、小さな子どものまま、人に言われなければ出来ない。教会で当番制で皆が皆均等な機会を与えられて、そして奉仕が巡ってくる、当番が回ってくる。そのようにして言われて、外からのプレッシャーによって働く。それは幼稚な姿です。でも残念ながらそんな幼稚な教会がいっぱいあります。牧師に言われなければやらない。お願いされなければ、命じられなければやらない。でも命じられる方はその方が楽なのです。神様と1対1になって祈って、そして神様から示されたことにちゃんと耳を傾けて従って、吟味してやっていく。その方が大変なのです。だから未熟な人は楽な方を選ぶとするわけです。未熟な人は律法主義的な教会を自ら選びます。牧師に指示されて牧師の言う通りにやる方が、楽なんです。むしろ主と1対1になって主との関係の中で自分のやるべき事を見出していく。その方が実は大変なのです。ですから成熟を目指して私たちは、言われなくても父の心を知って、そして父を喜ばせるその愛の関係の中で動くようになる。それを目指していきたいということ

です。それがイエス・キリストの姿であります。

21 節から最後を読みたいと思います。『²¹ 律法の下にいたいと思う人たちは、私に答えてください。あなたがたは律法の言うことを聞かないのですか。²² そこには、アブラハムにふたりの子があって、ひとり女奴隷から、ひとり自由の女から生まれた、と書かれています。²³ 女奴隷の子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束によって生まれたのです。²⁴ このことには比喩があります。この女たちは二つの契約です。一つはシナイ山から出ており、奴隷となる子を産みます。その女はハガルです。²⁵ このハガルは、アラビヤにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、彼女はその子どもたちとともに奴隷だからです。²⁶ しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。²⁷ すなわち、こう書いてあります。「喜べ。子を産まない不妊の女よ。声をあげて呼ばわれ。産みの苦しみを知らない女よ。夫に捨てられた女の産む子どもは、夫のある女の産む子どもよりも多い。」²⁸ 兄弟たちよ。あなたがたはイサクのように約束の子どもです。²⁹ しかし、かつて肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりです。³⁰ しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子は決して自由の女の子とともに相続人になってはならない。」³¹ こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子ではなく、自由の女の子です。』

21 節のところに「律法の下にいたいと思う者は、律法の言うことを聞くべきではないのか。」と、パウロはチャレンジしております。ここで言われている“律法”は勿論ユダヤ人に対する言葉ですから、特に『モーセ五書』を指しています。“トーラー”と呼ばれるものです。実際にその“トーラー”の中に創世記があります。パウロはその創世記からユダヤ人たちの父祖と呼ばれるアブラハムのことを取り上げて、今彼らを説得しようとしています。彼らに反論しようとしています。神はかつてアブラハムに約束されました。その時はアブラムと呼ばれていました。アブラム、「高貴な父」という意味ですが、そのアブラムの名前は今後アブラハムに改名される。アブラハム、それは「多くの国民の父」という意味です。まだ子どもが 1 人もいなかった時から皮肉なまでに彼の名前はアブラム、「高貴な父」、「高められた父」。子どももないのに「高められた父」とは。いじめられたかもしれません、馬鹿にされたかもしれません。でも子どもがないのに神は「あなたの名前はこれからアブラハムに変わる。」アブラムからアブラハム。“ハ”が付くわけです。“ハ”という言葉はヘブル語のアルファベットでは 5 番目に来る言葉で、聖書で 5 の数字は恵みの数字です。恵みによってアブラムからアブラハムに変わるわけです。「高められた父」から「多くの国民の父」。そして「あなたの子ども、子孫は海辺の砂の数ほどに、空の星の数ほどに増え広がるのだ。そしてあなたは新しい地、わたしの示す約束の地へと導き入れられて、そこで乳と蜜の流れる地においてあなたは祝福される。」素晴らしい約束を神様からアブラムは受けたわけです。

ところが「子どもが生まれる、子孫がそんなに増え広がる。」という約束を受けながらもちっとも現実においてはそれが遅々として目に見えて進んでいないようだ、だんだん心配し始めたわけです。だんだん苛立ってきたわけです。アブラハムが 86 歳となり、サラは 76 歳となり、そろそろ子どもがもう授かるには限界であると。「とても神の約束は自分たちの身にはおきそうもない。ちょっと考え直さなければいけない。この神の約束は文字通り捉えるべきではない。もっと現実的に、もっと人間的に捉えるべきである。」と。サラは 1 つのアイデアを夫のアブラムに告げます。「私には、このエジプト人の女奴隷のハガルがいる。このハガルとあなたは性的関係を結んで、そしてこのハガルによって子どもを産んで、その子どもが私の子どもとなる。つまりハガルが代理母の役割を果たして、そのことによって私たちに子孫が与えられる。そしてその子どもが海の砂の数ほどに、空の星の数ほどに増え広がるんだと、そういうふうに私たちは解釈すべきである。そのようにしてこの約束は実現出来るんだ。」と。そしてその妻の提案に対して夫のアブラムは「それは良いかもしれない。」ということで実際にアブラムはハガルと関係を持つわけです。そして代理母として確かにハガルは子どもを身ごもって、その子は「イシュマエル」と名付けられるわけです。でも、このイシュマエルが後にトラブルの種となります。そして、その後というのは今日まで尾を引いています。なぜならばイシュマエルの子孫はアラブ人です。今日も中東問題、それは聖書に端を発するものです。ハガルとアブラムが性的関係を結んで、人間の力で、人間の知恵で肉的努力によって生み出したのがイシュマエルですから、そのイシュマエルが今でも悩み

の種となっているわけです。ユダヤ人を脅かす存在となっているわけです。そのようにしてイシュマエルが生まれたわけですが、しかしそれから 13 年経ってから神はかつてアブラムとサラ(サライと呼ばれていましたが)に、その 2 人に、夫婦に約束したその子どもを奇跡的に、超自然的にお与えになるわけです。その子の名は「イサク」となるわけです。

約束の子が与えられるまでにはタイムギャップがありました。往々にして聖書においては約束が与えられてから約束が成就するまでの間には、私たちが想像する以上の時間がかかるということがあります。いわゆる約束と約束の成就の間には、それなりの時間のタイムギャップがあるということです。そのことを私たちは知らなくてははいけませんし、認めなくてははいけません。聖書には沢山の約束があります。でもその約束を私たちは自分のタイミングで成就して欲しいと願うわけです。でも神のタイミングがあるということを忘れてはいけません。タイムギャップがあるんです。神があなたに約束されてから、しばらくしてから神がそのことを成就する。神の最善のベストタイミングにおいて。でもそれが中々私たちには分からないわけです、待てないわけです。もう時間切れだと思ってしまうのです。そこで私たちも同じようにして「発想の転換をしようじゃないか。もっとこれを現実的に捉えようじゃないか。」私たちに分かるレベルで都合よくハガルを用意するわけです。そしてハガルによってイシュマエルを産もうとするわけです。でもそれは必ずトラブルの種になる。後々に子々孫々にそれは負の影響をもたらす、悩みの種となるということも忘れてはなりません。実に私たちは短気です。待ちきれないんです。でも聖書によれば「**約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐である。**」とヘブル書に書いてあります。でも待ちきれないから、中々忍耐出来ないから私たちはアブラムとサライのようにして、自分勝手に私的解釈して「神の約束を成就するためには、私の知恵が必要だ、助けが必要だ、手助けが必要だ。こうしたらいい、ああしたらいい。こうすればうまくいく、こうすれば神の約束通りに物事は進む。」と、イシュマエルを産んでしまうわけです。『天は自ら助くる者を助く。』それが如何にも聖書に書いてあるかのように思い込んで、自らを助けなければいけない。「神様の約束を成就するためには、もっとこうした方が良い、ああした方が良い。こうすべきだ、ああすべきだ。」と、ハガルを用意してイシュマエルを産もうとするわけです。人間の浅知恵によって。こんな有限なる人間の力で、全知全能の永遠の計画を持たれている神の約束を成就しようなどと、不遜にも私たちは神を手助けしようと思ってしまうわけです。「そうしなければ神の約束は成就しない。そうしなければこのことは成功しない、成り立たない。そうしなければ神の栄光は帰せられない。神の栄光を現わすためには、私がこうした方が良い、ああした方が良い。これが成功しなければ、このタイミングでうまくいかなければ、神の栄光が現れないから、だから私はこうするんだ、ああするんだ。」と。必ずそうすれば後悔することになります。イシュマエルを産んだことをアブラハムとサラだけではなくて、アブラハムの子孫も、今日のユダヤ人もずっと後悔しています。必ずツケを払うことになります。イシュマエルを産んだことの代償は計り知れないほど大きいということを私たちは聖書からあらかじめ教えられております。待ちきれずに自分の力で、自分の方法で、自分のタイミングで。気を付けて下さい。

それは全部比喩だと言われています。24 節『このことには比喩があります。』と、たとえば。旧約聖書の物語は、ただの読み物としての意味・目的を持たせているのではなくて、それは新約聖書の霊的真理を表すものとしてまるで絵本のようにして与えられているということです。私たちは挿絵がないと中々分からないものです。絵本の方が分かりやすいわけです。だから霊的真理を私たちは旧約聖書の絵本を通して学ぶことが出来ます。これが比喩・たとえと言われていることです。それによればハガルというのはアラビアのシナイ山を指すとパウロは言いましたが、実際にハガルはこのアラビア地方のシナイ山あたりの出身だったと思われまます。そしてシナイ山においては 10 の言葉、十戒が与えられたわけですから、それは律法を表しています。ハガルは律法を表しています。一方でシナイ山に対するエルサレム、これはシオンの山とも呼ばれていますが、でもここにあるエルサレムはユダヤ教の首都、そこにはエルサレム神殿があったわけです。神殿においていろいろな儀式が行われていたわけです。それを守らなければ救われない、霊的になれない。言わばこのエルサレムというのはユダヤ教の首都、律法主義者のメッカみたいなものです。メッカと言うとちょっと語弊があるかもしれませんが、とにかく代表ということでもあります。

それと対照的にサラは上にあるエルサレム、自由の女であると。そしてその自由の女から生まれた自由の女の子

どもはイサクであります。約束の子です。それは肉によらない、神の一方的な恵みによる子であります。奇跡の子であります。超自然的に生まれた者です。人間の努力は一切そこには差し挟まれていません。アブラハムとサラはもう完全に老いて、もう完全に枯れていたわけですから。閉経していたわけですから。子どもを産める体ではなかったのです。にもかかわらず神はこの夫婦からイサクという子どもを産ませたわけですから。

そして**27節**のところには**イザヤ書 54章 1節**の聖句が引用されています。『子を産まない不妊の女』というのが非ユダヤ人、異邦人です。そしてそれは『産みの苦しみを知らない女』とも言われています。逆に『夫のある女』それはイスラエル人、律法の下にあるユダヤ人のことです。でもその『夫のある女』よりも、ユダヤ人よりも、『夫に捨てられた女』若しくは『不妊の女』、『産みの苦しみを知らない女』異邦人の方が多くの子どもを産むんだということが書いてあります。**29節**によるとそれは**創世記 16章**に記録されている物語の比喩となっています。アブラハムの時代、ちょうどイサクが乳離れした時に(2、3歳の時に大体乳離れをするのですが)その時には盛大にパーティーが開かれます。宴会が開かれるわけですから。**創世記 16章**に書いてあります。なぜパーティーが開かれるかと言いますと、「もうこの子は母の乳房に頼らなくてもいい。乳離れしたんだ。」と。成長を喜んで記念して乳離れした子のパーティーを開くわけですから。お母さんも楽になります。子どももこれでようやく依存状態から離れて、これからはちゃんと自分で固い肉を食べることができるようになる。「あなた方はもはや教師になってなければならない。」と、**ヘブル 5章**にありますけれども。御言葉のミルクを飲みながらも、固いものを食べる。肉を食べる。そのような成長も遂げなくてはならないわけですから。

ここで話を戻しますと、そのパーティーの際に既にもう13歳以上、もう15、16歳になっていたイシュマエルはこの年端もいかない乳離れしたこの小さなイサクをからかっていた、いじめていたとあります。それは単に所謂からかいではなくて、完全に命を取るほどに虐待をしていたという状態でした。それを見たイサクの母サラは、イシュマエルとその母ハガルを追い出して欲しいと。このままではイサクが殺されてしまう。それは比喩です。今日もイサクの子どもはイシュマエルの子どもにいじめられます、からかわれます。すなわち恵みによって生まれた約束の子は、律法によって生まれた肉の子にいつもいじめられる、迫害されるということです。律法主義者は恵みの下に生きている者をいつも馬鹿にするんです。見下げて、そしていじめるんです。迫害するんです。律法は肉しか生みません。ハガルはイシュマエルしか生まなかったわけですから。律法主義者は肉的になります。私たちは肉的な人というつつい放縦主義者のことを思い出すかもしれません。好きなだけ肉を喜ばせ退廃的な生活をしている。酒を煽って、麻薬を打って、そして不特定多数の異性と性的に不道德な罪を犯している、そういう人たちのことを。ギャンブルの虜になっているような人たちを私たちは肉的な者と言うかもしれませんが、でも実際には律法主義者こそが肉的な者だということです。律法は肉しか生みません。そして恵みに生きる者を馬鹿にするわけですから。「自分の方が出来ている。自分の方が頑張っている。どうして自分と同じようにやっていないのか。私と同じようにやっていない。」そういう人たちを馬鹿にして責めて、そして裁くわけですから。今日もそれは変わりません。

30節を見て頂くと『しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人になってはならない。」』と、これも**創世記 21章**からの引用であります。『追い出せ。』あなたの心のうちに律法と肉があるなら、それをあなたの心の内から締め出さない、という比喩です。

そんなハガルとイシュマエルを追い出すなんて。確かにアブラハムは自分の子どもを追い出すなんて、とても出来ないと思って心痛めたわけですからけれども、でもその時には主はアブラハムに現れて「あなたの妻の言うことを聞きなさい。」と。これは夫の皆さんにも大事な聖句だと思って伝えておきたいと思います。時にあなたの妻の言うことを聞きなさいということありますから、その時には妻の言うことを聞かなくてはなりません。「俺に従え。」聖書に『妻は夫に従え。』と書いてあるじゃないか、とあなたの夫は言うかもしれませんが、でも聖書にはアブラハムに対して、信仰の父に対して「あなたの妻の言うことを聞きなさい。」とも書いてあると、そうやって切り返して頂きたいと思います。ですからクリスチャンの妻は、皆そこには蛍光ペンか何かですごい印が付いていると思うんですけれども。これは比喩で

すから「追い出さない。」というのは、あなたの心の中に律法主義のメンタリティーがあるならば、そして律法主義から生まれた肉的な性質があるならば、それは憐れみをかけてはならない。すぐにでも追い出さなければいけない。私たちはイサクの子です。サラの子です。そしてイサクの子孫であります。自由の子どもです。律法にはもう縛られない者です。律法だとか、戒律だとか、規則だとか、ルールがなければ生きていけないのではなくて。私たちはもう神の子どもとされた者、約束の子どもです。恵みによって救われた者。そして私たちはこの神とは愛の関係を、父と子の関係を与えられています。律法は不自由な生活を強いますが、恵みは自由をもたらします。奴隷根性からもう解放されているんです。律法は常に人を奴隷にします。恵みはあなたをいつも自由にします。このコントラストをしっかりと自分の心の中に見て欲しいと思います。

愛にも縛りがありますけれども、愛の縛りと律法の縛りは大違いです。愛の縛りというのは、夫婦が愛し合っているならばお互いは縛り合っています。他の異性、他の人と不倫をするなんてとんでもない。他の人を好きになるなんてとんでもない。それを縛られているとか言いません。結婚しているのに、例えば私が他の女性とデートとするとか、仲よく楽しくプライベートでどこかの素敵なレストランで食事をする。妻がその姿を見たらどう思うでしょうか。勿論私はそんなことをしたいとは思いません。なぜならば私は妻を愛しているのでそんな事は夢にも思いません。でも愛していないならば、「他の女性と食事をしてはいけません。」というルールがなければ、私はそれを平気で破っていくらでもいろんな女性たちと戯れるかもしれません。でも愛は自由の名のもとに私たちをむしろ拘束するわけですが、律法は不自由にして私たちを縛りつけるだけであります。その縛りは全然違います。「教会に行かなければいけないとか、聖書を読まなければいけないとか、祈りをしなければいけないとか、断食をしなければいけないとか、奉仕をしなければいけない、献金をしなければいけない、それは縛りです。」と、あなたは言うかもしれませんが、そうではないのです。それが父と子の愛の関係においてならばその縛りはむしろ心地よい縛りです。縛られていたいとすら思うわけです。生涯夫だけでいい。妻だけでいい。他の人は要らない。自由です。でもそれが喜びなんです。それが楽しいのです。そうしていたいのです。1人の人だけでいいのです。一生縛られていたい。一生1人の人に仕えていきたい。愛していきたい。それで満足するわけです。

これでもう終わりたいと思うのですけれども、最後にこの律法とそして恵みのコントラスト、それは明らかであるということです。ただし律法にもそれなりの意味や目的が与えられていたもので、律法を害悪だとか悪いもの、律法と聞くだけでもう私たちは嫌悪感を覚えてしまうかもしれませんが、パウロによれば律法は必ずしも悪いものではない。むしろ使い方を誤らなければ良いものであると、**第一テモテ 1:8**にも書いてあります。『しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。』律法は使い方さえ間違えなければ、むしろ良いものであると。それはどういうことかと言うと、律法は私たちの鏡のような存在ですから、実際に私たちが霊的にどういう状態にあるのか、罪人であることを示します。キリストという救い主が必要であるということを示します。**ガラテヤ 3:24**では、律法はキリストへ導くための養育係だと言われていますから、その意味においては良いわけです。また律法はハガルというふうに比喻されていましたけれども、律法は二度と私たちとは再婚しないということです。アブラハムがハガルを追い出したら、もうハガルとアブラハムは再婚しなかったわけです。ですからパウロはそのことを**ガラテヤ 3:3**で指摘しています。『あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。』もう一度ハガルを呼び戻して、ハガルと再婚するとでも考えるのですかと。絶対にそんな事はありません。あつてはならないことだと。律法とは私たちは二度と再婚しないということです。

そして律法と再婚するようであるならば、再婚したような感覚を持っているならば、あなたはそもそも最初から恵みによっては救われていないのかもしれないということを疑わなくてはなりません。恵みによって救われている者は絶対に律法とは再婚出来ないからであります。律法は恵みの後から来たのです。ハガルがそうであったように、サラの後にハガルが来たわけです。アブラハム契約の方がモーセの十戒よりも先にあったのです。恵みが先なんです。でも恵みが与えられているのに人間は愚かですから「恵みなんか要らない。自分で何とでもできる。自分の力で、自分の知恵で。」そのように誤解して誤って私たちは恵みから外れてしまったので、神は敢えて律法を与えたわけです。

「私は大丈夫。」という人に対して、律法によって「否、あなたは大丈夫ではない。」と。「私は何でも出来る。」まるで自分が神であるかのように思い込んでいる人に対して「あなたは神ではない。神はただ 1 人だ。」と律法は説いたわけですから先に恵みがあつたのです。でもその恵みを人間は無駄にしたわけですから。行いで恵みを無駄にしたわけですから。行いと恵み、これは反対語であります。恵みが要らないと思うようになって、そこで律法が与えられて、そして律法がある程度の役割を果たしたら、もう役割は要らなくなるわけですから。イエス・キリストが来られたら、もう律法は要らないわけですから。約束の子イサクが与えられたら、もうハガルもイシュマエルも要らないわけですから。

最後のポイントは、律法もしくは律法主義というものはこの世で形成されるということです。何故かということ、ハガルはどこから貰ってきたのでしょうか。ハガルはエジプトから貰ってきたんです。なぜエジプトにおいてハガルを得たのかということ、それは皆さんご存知の通りです。アブラハムが暮らしていたあの約束の地において飢饉があつたのです。その時アブラハムは神に祈り求めませんでした。食料が豊かにあるエジプトに行けば、食料避難すれば食い繋いでいける。家族はこれで路頭に迷わずに済むと、そう判断して人間的な知恵によって彼はエジプトへ家族を連れて食料非難してしまつたわけですから。本来であれば飢饉の時、神様に「助けて下さい。あなたの導かれたこの地において飢饉に見舞われています。でもあなたはこの地に私に住むように導かれたではありませんか。」そのように祈ればきっと飢饉の時でも奇跡的にマナか何か降ってきたかもしれません。ウズラが飛んできたかもしれません、アブラハムのところには。でもアブラハムはそうせずに自分のちっぽけな頭でこれがベストだと思つて、良かれと思つてエジプトへ行ったわけですから。そしてエジプトで何が起つたか、分かっていますね。エジプトの王パロが、妻のサラが見目麗しい女だと思つて。サラと言う意味はちなみに「プリンセス」です。素晴らしいプリンセス。自分のハーレムに 1 人加えようと思つたわけですから。そうした場合夫のアブラハムは必然的に邪魔者となりますから殺される。殺されてはいやだ。死にたくない。サラには「自分の妻ではなくて妹だと言つてくれ。だって私は殺されたくないから。あなたがレイプされようと私には構わない。私さえ生きていればそれで良いのだ。」と、妻には人身御供になつてくれと。そして妻のサラはそれを承諾するわけですから。何という夫かと皆さん思うかもしれませんが。でもそのサラの神に対する信仰が報われたわけですから。神はサラを守つたのです。そして神はそのサラの従順に対して豊かな祝福を与えて下さつたわけですから。それがエジプトの財宝だつたわけですから。そしてその中に実はハガルも含まれていたわけですから。皮肉な話です。アブラハムのその肉적인浅知恵、肉적인方法、肉적인努力。それによってハガルという女性も同時に手に入れてしまつたわけですから。最初からエジプトに行かなければ、ハガルもいなかったのです。イシュマエルは生まれなかつたのです。エジプトはこの世のシンボルですから、ハガルはどこで手に入れるか。それはこの世で手に入れるということです。律法主義はどこで手に入れるのか。それはこの世で手に入れるということです。この世の生活が長ければ長いほど、この世の影響を受けて私たちはハガル的な要素を沢山持つて、律法主義的な要素を沢山受けてしまつます。ですから私たちはこの世から離れるのであります。多くの人は誤解しています。クリスチャンホームの子どもたちがこの世ではなくて教会ばかりで育つてしまつると彼らはついつい律法主義的になつてしまつ。とんでもありません、そうではないのです。むしろ律法主義はこの世で得るものであるということです。ではなぜ牧師の子どもが、なぜクリスチャンホームの子どもがそんなにも律法主義的なんですか？それは彼らが教会に通つていながら、クリスチャンファミリーにおいて育てられながらも、彼らはこの世にどっぷり浸かつていふことを意味しているだけのことであります。イエス・キリストを見れば明らかです。イエス・キリストは律法主義的だつたのでしょうか。そうではないですね。罪人たちと喜んで一緒にご飯を食べました。そしてイエスには常に恵みが溢れていました。この方には恵みとまことが豊かに見られたわけですから。ですからイエスのように最初から神の恵みに浸り込んで、そしてこの世から離れて暮らしているならば、その人は必然的に恵み深い、恵み豊かな者になります。でもパリサイ人や律法学者のように宗教儀式には熱心かもしれません。教会には足繁く通つて、毎日聖書を読んで、毎日祈つて断食すらして、そして 10 分の 1 献金も忠実にするかもしれません。ファミリー・デボーションも持つかもしれません。家庭礼拝もやるかもしれません。でも、それでも律法主義に成り得るということを知つて頂きたいと思つます。あなたがこの世に身を置いている以上、あなたはハガルを得てしまふということです。この世というのは勿論、神の国と相反するものであります。神の支配して

いない、むしろこの世の神、この世の支配者が支配している世界。それがこの世であります。このエジプトであります。教会の中にも、職場にも、家庭にも、この世は存在します。ですから私たちはこの世には近づかない。この世と調子を合わせない。この世から離れる必要があります。それは勿論極論に至らないように注意して頂きたいと思いますが、世離れしてどこか戸隠山か何かに山ごもりしなさいと言っているのではないです。そうではなくて、この世の要素、説明しなくても皆さん分かります。肉的なもの、人間的なもの、自分の知恵や自分の力によるもの、それらがすべてこの世に属するもの、それが全てエジプトです。それが全てハガルです。それが全てイシュマエルです。そこから離れなくては行けない。そこにいる以上は沢山イシュマエルが生まれてきてしまうということになります。追い出さない。あなたが心から、あなたの家庭から、あなたの職場から、あなたの教会から、このハガルを、このイシュマエルを追い出さない。それがパウロのメッセージであります。

今日はこれで終わりたいと思いますので、また **5 章**もずっとむしろ私たちは約束の子ども、自由の子どもですから、キリストにある自由をしっかりと見据えて、この自由の中に生きるべきだということをパウロは奨励しています。 **5 章**も楽しみにして頂きたいと思います。